

広告

子どもの命と心 地域で守る

学校や通学路などで起きた主な事件

▽1999年12月 京都市伏見区の市立日野小学校の校庭で、小2男児が刺され死亡。容疑者の男(当時21歳)が捜査員の任意同行中に自殺

▽2001年6月 大阪府池田市の大阪教育大学附属池田小学校に侵入した宅間守・元死刑囚(執行済み)に、小1男児1人、小2女児7人が包丁で刺され死亡

▽2004年6月 長崎県佐世保市の市立大久保小学校で、小6女児が同級生の女児にカッターナイフで刺され死亡

▽2004年11月 奈良市立富雄北小学校1年の女児が下校途中、小林薫死刑囚に連れ去られ、殺される

▽2005年2月 大阪府寝屋川市の市立中央小学校に17歳の無職少年が侵入。男性教諭1人が死亡、教職員2人が負傷

▽2005年11月 広島市安芸区で下校途中に連れ去られた小1女児が他殺体で発見され、ペルー人の男を逮捕

▽2005年12月 栃木県今市市(現・日光市)で、小1女児が下校途中に行方不明になり、他殺体で見つかる

▽2005年12月 京都府宇治市の学習塾で、アルバイト講師が小6女児を殺害

▽2006年2月 滋賀県長浜市で登園途中の幼稚園児2人が、別の園児の母親に殺される

▽2006年5月 秋田県藤里町で、小1男児が他殺体で見つかり、近くに住む女を逮捕。女は自分の娘(小4)の殺害でも追起訴

▽2006年8月 山口県周南市の徳山工業高等専門学校の研究室で、女子学生が同級生の男子学生(当時19歳、自殺)に殺害される



子どもの安全に関するパネリストの意見に熱心に聞き入る参加者

「学校とリスクマネジメント」

亀井克之・関西大学
総合情報学部教授

講演

考えよう学校の安全

みんなで守る 安心のまちフェア 特別企画
シンポジウム

あるというものです。300の「ヒヤリ」「ハッと」を、「何もなくてよかった」で済みますか、「何かの予兆だ」と考えるか。事故を予防するには、あらゆる可能性を洗い出し、目に見える形にして、平常時から危機

保護者による送迎も

1982年にアメリカで発生した「タイレノール事件」は、リーダーシップのモデルとされる出来事です。ジョンソン・エンド・ジョンソン製の鎮痛剤に毒物が混入され、7人が死亡

「共働きでは無理」とか言って、歓迎されない雰囲気があります。しかし、子どもの安全を最も強く願うのは親自身です。日本でも、できる範囲で子どもの送り迎えをするなど、安全への願いを行動に移してみてもよいのではないのでしょうか。

リスクマネジメントの考え方、「ハイリソフの法則」があります。「一つの重大な事故の陰には29の小さな事故があり、29の小さな事故の後には、300のちょっとした出来事が

意識を高めておく必要があります。事故の直後や渦中には、危機管理が焦点になります。重要なのはリーダーシップであり、組織を導くコミュニケーション能力です。想定外の事態に遭遇したとき、よりよい決断を下せるリスク感性も求められ

しました。同社の会長は発生直後からテレビに出演し、「わが社のタイレノールは危険です」と呼びかけ、逆に評判を高めたのです。危機に直面しても、まず冷静に、ほほ笑みとプラス用語を心がけること。そして、いざという時に備え、日頃の訓練が重要です。学校のリスクマネジメントに目を向けると、私が留学生を送ったフランスでは、小学校は親による送り迎えが当たり前でした。ボランティアなど地域の取り組みはまったくない。習い事や友だちの家に行くにも親の送迎が一般的です。日本では、親による送迎は「過保護だ」とか言って、歓迎されない雰囲気があります。しかし、子どもの安全を最も強く願うのは親自身です。日本でも、できる範囲で子どもの送り迎えをするなど、安全への願いを行動に移してみてもよいのではないのでしょうか。

亀井 通学路の安全確保には、地域のボランティアの方々が貢献しています。安達 富雄北小学校では、事件直後から、集団登下校を実施しました。全校児童950人の奈良市最大のマンモス校で、通学距離は遠いところで1・4キロ。このため、通学圏内に34(当時)のターミナルを作り、周辺の子どもが保護者に連れられて集まり、学校までボランティアが付き添って登校する方式にしました。帰りはその逆で帰宅させ、「家から学校まで一人にさせない」という原則を貫いたのです。今年10月から児童だけの集団登校になり、合計90の立哨見守りポイントを作っています。亀井 取り組みの成果は、安達 子どもたちが変わりました。目を見てあいさ

つする、高学年の子は小さな子の面倒を見る、この教育効果は大きかった。保護者も変わりました。地域にこれほどやってももらって、私たちがもっとやる必要があるんじゃないの」という声を聞いたときは、本当にうれしかった。その保護者たちが10年、20年後、きっと富雄地区を支えてくれると思っています。

亀井 通学路のハード面の対策を聞かせてください。

平岡 防犯ブザー、ホイッスルはほぼ普及し、携帯電話を持つ子も多くなってきました。ICタグや防犯カメラ等で所在を確認するシステムも出てきています。ただ、機械は犯人逮捕まではしてくれません。最後は人の介入が必要ですが、それが、ボランティアで可能なか、検証しておく必要があります。児童への声かけ事例が多く



亀井 克之氏

かめい・かつゆき
関西大学総合情報学部教授。日本リスクマネジメント学会常務理事。2005年—06年、フランス・モンペリエ第1大学経営学部ERFI客員教授。

亀井 子どもを命を守ることにしては、すべての人が当事者と心得て、社会全体で取り組んでいかなければならないと思います。



平岡 裕氏

ひらおか・とおる
NPO法人大阪府防犯設備士協会事務局長。1958年大阪府警採用。大阪府警刑事部参事官や中国管区警察局長、公安部長、大阪府警察学校長を歴任した。

社会全体で取り組み

犯罪に強い世の中へ

報告されています。また、過去の事例を見ると、低学年の児童が一人になった瞬間を狙われています。迅速・的確な対応が求められています。亀井 最優先に取り組みべき課題は、谷口 「死なない、殺さ

ない」「いじめない、いじめられない」、つまり「被害者にも加害者にもならない子ども」を、学校・保護者・地域社会が、それぞれの役割と責任を明確にした連携の中で育てるという原点に回帰することです。津田 宅間のような人物を育てないこと。そのために自信(自己肯定感)を持つ子どもたちを育てたい。

平岡 犯罪者を生まない社会、犯罪に強い社会をどう醸成していくか、このことも大切です。わいせつ事案など、子どもが遭遇する事案は連続性があり、検挙されない限り解決しない場合が多いと言えます。犯罪の予防活動と同時に警察等による検挙活動の重要性を忘れてはならないと思います。